

マルカブリュ研究の展望

—— 作品11をめぐる ——

瀬戸直彦

はじめに

マルカブリュといえば、ギェム（ギョーム）9世に続いて、12世紀前半、とくに1130-1148年ころに活躍した著名なトルバドゥールである。俗語を用いた初期の詩人たち、すなわちセルカモン（同じガスコーニュの出身とされる）、ジャウフレ・リュデルらに比較して、彼の40にあまる残された作品は異彩を放っている。当時の抒情詩の主流をなす、いわゆる宮廷風恋愛詩（シャンソン）に分類できるものが数編しかない。十字軍歌やパストゥレルなどにおいて器用な才能をみせてはいるものの、大多数にのぼる作品がことごとくシルヴェンテス（風刺詩）であり、理想化された宮廷風恋愛の裏にひそむ姦通の不道徳性や、当時の社会の腐敗と矛盾、知識人に特有の女性倦厭思想を、あらわな表現を用いて激烈な調子で非難したからである。しかも *trobar clus*（密閉体）と、のちに呼ばれることになる難解な表現や、多種多様のことわざを駆使して、それを理解できる教養の高い人々のためにだけ歌ったからであった。のちの「伝記」には、捨て子であってセルカモンと一緒にいたこと、毒舌で世に知られたが、それがたたってギュイエンヌの城主たちに殺されたなどと、例によって信憑性に疑問のあることしか書かれていない。しかし彼の教養の裏には、中世ラテン語の伝統を引く知識がうかがわれるから、中世ラテン語を用いたゴリアルドゥス詩人にも似て聖職者くずれなのではないかと推測することはできよう。

その個性的な作品とそれともなう作者のイメージによるのであろう、たとえばいわゆる冒険物語にぞくするオイル語の『ジュフロワ・ド・ポワチエ』（13世紀）のなかに作中人物として登場する。主人公の正体を見破り、彼を英国の宮廷からフランスに連れてこようとする使者となる（3601-3692行）。オック語による『フラメンカ』（13世紀）では、大宴会の場面でその詩（*vers*）が朗読される（702行）。現代でも小説の主人公として使われることさえある。風刺詩の得意な詩人といえば、13世紀後半に活躍したペイレ・カルデナルのことが思い浮かぶが、ペイレには歴史事象の同定にかんするむずかしさはあっても、マルカブリュのごつごつとした表現の難解さと露骨さはない。

ここでは、これまでなされてきたこの詩人についての研究を概観してから、その作品11「私には嬉しい、蛙が歌い」で始まるシルヴェンテスを題材に、作品の深みと解釈上の問題点を浮きば

りにしてみたい。導入部は春の情景のトポスであり、ついで「武勲」が「悪意」に攻撃され、「大義」が虜となるさまを描き、権力者の吝嗇ぶりを嘆く。さらに姦通を批判したうえで、カスティリャ王（皇帝 *hispaniarum imperator*）アルフォンソ7世とおぼしい人物をたたえるアレグレットへの非難の呼びかけで終わる。

I 研究史

マルカブリュの全作品の校訂は、ガスコーニュ・ベアルン方言に詳しい、1909年に刊行されたドゥジャンヌ医師（1842-1909）によるものしか長い間存在しなかった。校訂者の死後に、当時トゥールーズ大学にいたアルフレッド・ジャンロワの手により、序文を付して刊行されたもので、ドゥジャンヌ自身も、またジャンロワも認めていたように、この詩人のテキストを手ごろな規模で、とりあえずまとめて提供するためであった。

それ以降、なかなか新しい校訂版の出現しなかったのにはふたつの理由があるように思える。ひとつは、誰もが認めるようにこの校訂は、ロマンス語文献学の専門家によるものではない暫定的な版であっても、その出来がけっして悪くなかったことであった。ドゥジャンヌにはテキストを見抜く天性の能力があって、それがきわめて難解な箇所を読解を可能にした（ジャンロワ）のであった。後世の者が、じっさい作品にとりかかっても歯の立たない部分が多すぎて、ドゥジャンヌ以上のものを全体として提出できなかつたのであろう。つぎに、そしてこれが最大の理由であろうが、イタリアのロマンス語文献学の泰斗アウレリオ・ロンカリア（1917-2001）が1950年から1968年にかけて、散発的に8篇（作品3, 6, 9, 15, 16, 17, 23, 33）ほどの校訂を研究誌に発表し、全作品の校訂を目ざしていると予告していたからである。しかし、これは結実せず、いたずらに年月だけが過ぎた²⁾。結局、マルカブリュ全体を対象にする校訂版は、イギリスの3名の研究者（ゴント、ハーヴェイ、パターソン）による2000年のものにいたるまで現れなかった。その間に、マルカブリュにかんする研究文献は増加するいっぽうで、1967年には、フランソワ・ピロがマルカブリュ研究についての書誌をまとめている。詳細かつ便利なもので、これまでさまざまな視点からなされてきた研究の絶好のガイドになっている。この書誌は1988年にゴントとハーヴェイによって増補された。ひとりのトルバドゥールについて論文形式の書誌がまとめられるのは例のないことで、やはりマルカブリュという個性あつたのことだと痛感させられる。

以下では、ドゥジャンヌの版とも2000年の共同作業とも異なり、C写本をもとにしたテキストを示しておきたい。他の写本との異同は、ふたつの校訂版を参照すればよいから、紙数の関係もあり、今回は異文欄にまとめることはしなかった。

C写本のテキストは、従来のM写本をもとにしたそれより、詩節がふたつ（III, IV）、トルナーダがひとつ（X）少ない（CにないIII-IV詩節では、「武勲」のほかに「若さ」や「喜び」が城攻めにあう。第X詩節は2行のみ）。カッコ内の数字は、Mにおける行数である。Cによるのは、

従来のテキストと異なったものを提出して、ことさら奇をてらうためではない。マルカブリュという作者には、写本によって詩節数の異同が多く、伝承の過程で脱落した可能性もあるが、当時のパフォーマンス性を踏まえたバージョンの違いととらえたほうがよいからである。これについては後述したい。このような視点から見た場合、Cのテキストにも存在意義が十分あると考えたからにはほかならない。なお、この問題にかんしては、私の立場をすでに2つの機会において、すなわち作品18と作品19を検討したさいに、それぞれC写本とA写本をもとにしたテキストを解釈したうえで、ある程度明らかにしてある⁴⁹。2000年の版で、この作品を担当しているのはリンドン・パターソンである。

II テキスト

PC 293, 11 (base: C)

mss.: C 172c-173a, M 141c-142a, R 29d-30a, a¹ 363-364 (109)

attributions: M: *Raimbaut dorenia* (Raimbaut d'Aurenga)

R: *alegret*

a¹: *Alegretz*

C table I (7v): *Marc e bru – Alegret*

éd.: Dejeanne, pp.42-48 (p.223); Thiolier-Méjean, *Chansons satiriques*, pp.81-83 (texte: Dejeanne);

Gaunt-Harvey-Paterson, pp.147-163.

métrique: Frank 649:1 7'a 7'b 7'b 7'a 7'c 7'd 7e 7'd

8 (ms.C: 6) coblas doblas, 2-3, 2 (ms.C: 1-3)

a: *anta, (ala), onja, ata*

b: *usca, (ilha), auza, esca*

c: *ama*

d: *iza*

e: *en*

ordre des strophes:

| Seto | I | II | | | III | IV | V | VI | VII | |
|------------------|---|----|---|---|-----|----|---|----|-----|----|
| C | 1 | 2 | | | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | |
| M | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| R a ¹ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | |

I 1 Belh m'es quan la rana chanta
 2 e'l sucx pueja per la rusca,
 3 per que'l flors e'l fuelhs e'l brusca

4 e`l frug reviu e ia planta,
 5 e`l rossinhol crid'e clama
 6 sa par qu'a per joy conquiza,
 7 plens d'orguelh, quar el no sen
 8 freg ni gel ni glatz ni biza.

II 9 Non aus so que m'atalanta
 10 dir d'una gent que`s fai cuscha
 11 qui Malvestatz franh e fruscha,
 12 qu'entre mil non truep quaranta / fol. 173a
 13 d'aquelhs que Proeza ama,
 14 qu'en un castelh l'an assiza
 15 e trazon li ben ab cen
 16 peiriers selhs que l'an reviza.

III 17 (33) No vuelh far paraula lonja:
 18 (34) preza es la francha cauza
 19 (35) e non troba fin ni pauza,
 20 (36) si no`s met recluz'o monja;
 21 (37) oc, e quascus la desrama
 22 (38) e las dens li franh e`l briza,
 23 (39) e no`l truep mas un paren,
 24 (40) de Portugual tro en Friza.

IV 25 (41) Ducx e reys senes messonja
 26 (42) l'an primier la boca clausa,
 27 (43) qu`elhs fan de pauc fag gran nauza
 28 (44) quar donar lur fai vergonha;
 29 (45) tant tem quecx que falha trama
 30 (46) per qu'en lur cort non es viza
 31 (47) copa ni enap d'argen
 32 (48) mantelh vair ni pena vaira.

- V 33 (49) Maritz qui l'autruy con grata
 34 (50) pot ben saber que `l sieus pescha
 35 (51) e mostra quon hom li mescha
 36 (52) e qu'ab eys son fust lo bata,
 37 (53) et elh fai tort si s'en clama,
 38 (54) que ben es egual deviza
 39 (55) quar qui car compra car ven
 40 (56) a segon la ley de Piza.
- VI 41 (57) D'aissi nays l'avols barata
 42 (58) dels ricx vius — qui Dieus descrezca !
 43 (59) *q'us no`n fai conseilh ni tresca*
 44 (60) no sia luazenja plata
 45 (61) sel qui la mainad'afama;
 46 (62) cist viest la blancha camiza
 47 (63) e fai son senhor valen
 48 (64) ni de si dons a sa guiza.
- VII 49 (65) Alegret, folh, en qual guiza
 50 (66) cujas far d'avol valen
 51 (67) ni de gonelha camiza !

leçons rejetées du ms. C

10. fai] sai 25 (41). e] er 43 (59). *qu_s non fai conseilh ni tresca (M)] manque*

試訳

- I 1 私には嬉しい 蛙が歌い
 2 樹液が木の表皮を 昇ってくるのが
 3 そして花と葉と 木の芽と
 4 果実とさらに樹木も よみがえるのが
 5 そして夜鳴き鶯が 鳴いて呼びかけ
 6 相手を求めて 誇りにみちて喜びのうちに
 7 つがうのが というのも鶯は寒さも

- 8 水も霜も北風も 感じないのだから
- II 9 言いたいことなのだが あえて私は述べない
 10 唾棄すべき 一群の人々について
 11 「悪意」が碎き 鞭打ち従わせる人々について
 12 「武勲」が愛する 人々はたとえ
 13 千人の人がいても 40人とは見つからない
 14 というのもかれらは 「武勲」を城に包囲したからであり
 15 そして再び 「武勲」を見つけるようなことがあると
 16 百にのぼる投石器で それを存分に攻撃するからである
- III 17 (33) 長広舌をふるう つもりは私にはないが
 18 (34) あの高貴な大義は 捕らわれの身となり
 19 (35) 隠者や修道女にみずから 身をやつさないかぎり
 20 (36) 決着も休息も 見つけれない始末
 21 (37) そうなのだ 皆それぞれ大義を破壊し
 22 (38) その齒をことごとく へし折っては碎いている
 23 (39) 結果として私には その身内は一人として
 24 (40) ポルトガルからフリースランドまで 見つけれない
- IV 25 (41) 公も王も これは嘘偽りのないことだが
 26 (42) 大義の口を 先を争って閉じさせた
 27 (43) ささいなことで 大騒ぎする連中なのだから
 28 (44) というのも与えることは かれらにとって恥辱なのだ
 29 (45) それほどみんな 大事な富の不足を恐れている
 30 (46) だからかれらの宮廷には 見当たらなくなった
 31 (47) 銀の器も 大杯も
 32 (48) 銀リスのマントも 銀リスの毛皮も
- V 33 (49) 他人の妻の conをつついている夫は
 34 (50) 自分の妻も 魚つりに行っているのがよくわかるはず
 35 (51) そしていかに 人が自分に煮え湯を飲ますものか
 36 (52) 自分の棍棒で自分を叩いていることを 身をもって示している

- 37 (53) それでもそれに不平を鳴らせば 誤りをおかすことになる
 38 (54) 以下のモットーは まさに正鵠を射ているから
 39 (55) すなわち ピサの流儀でいうところの
 40 (56) 「高く買う者は 高く売らなくては」である
- VI 41 (57) ここから権勢高いよこしまな者たち 一神に貶められるがよい一の
 42 (58) あの悪辣な 詐欺行為が生まれるのだ
 43 (59) [そのうちの一人として 会議もダンスも開催しないのだから]
 44 (60) 完全な賞賛など 与えるべきではない
 45 (61) 一族の者を餓えさせる あの男に対しては
 46 (62) この男のほうは 白い肌着をつけては
 47 (63) 自分の領主を ご立派な方にしたうえで
 48 (64) その奥方さまを 好きなようにしている
- VII 49 (65) アレグレット 愚か者よ どのようにしたら
 50 (66) 卑劣漢を 立派な男にしたてたり
 51 (67) 粗末な胴着を きれいな肌着にしたてるなどと考えられるのか

notes

1. *la rana* : 典型的な春の情景のトボスから始まっているが、「蛙」の出てくるのはめずらしい (COM2によれば, Marcabru に 3 例, Bernart Marti に 2 例)。作品 3 の第 I 詩節と同工異曲である。後述するように、この作品はアレグレットの詩を踏まえての非難ないしパロディーである。蛙が歌うというのは、しゃがれ声でわめく内容空疎のアレグレットという含意があるのかもしれない (パターソン)。ペイレ・ダルヴェルニュによる有名な「文芸批評」のシルヴェンテス (PC 323, 11) では、最後にペイレ自身を「壺のなかの蛙のような声で歌う」(*a tal votz Que canta cum granolh'em potz*, vv.79-80) (瀬戸『トルバドゥール詞華集』, p.126, cf. p.276) と述べて、自分の作品の騒々しいことを自嘲している。ただしこちらは *grenouille* である。

10. *cuscha* : ドウジャンヌは LR2, 533 にもとづいて « *coquine*» ととり (v.11 によると「悪意」の善良な被害者ともとれる。 *qui = cui*)、パターソンはカタロニア語の *cusc, cusca* « *lame, idle, slow at work*» のほうが近そうだとし、 *qe's fa chusca* を « *who are turning lame*» と解している。ペルージュは Mistral (TDF, I, 692b) にある *cuschous* « *qui a de la répugnance, délicat, difficile*» と、熟語 *fa cusche* « *inspirer de la répugnance*» を指示している。だが FEW16, 430b: *kuski* (germ.) « *rein, keusch*» には、これらの意味と形がすべて包含されている (*cusc* « *pur, vertueux*» Marcabru, bas-limousin) (A. Thomas, *Mélanges d'étymologie fr.*, 2e éd., 1927, pp.80-81) は、マルカブリュのこの部分をすでに論じて、「高潔であることを気取る」から Mistral の挙げた熟語

の意味が出てくると示唆している。なお *se faire cuscha* という代名態については、Jensen, *Syntaxe*, § 445を参照)。

11. *fruscha* : ここで想定される *frusc(h)ar* という動詞は、はっきりとは文証されていない。PL は、*frustar* について、«*fouetter, fustiger*» (cf. FEW 3, 917a: *füstis* : apr. *frustar* «*fouetter*») とともに別項で«*frustrer; dépenser?*»としているが、SW3, 611では、*frusca* は *frustar* の活用の別形として挙げられている (cf. Paterson, p.158)。ここは2詩節ごとに同じ脚韻を用いる *coblas doblas* を構成しているから、*-sc(h)a* で終わる必要があり、*frusta* とは直せない。つぎの2例：Peire Vidal, PC 364, 38, v.74 (*frustatz: fruscatz* (DI), *frustratz* (R)); Guillem de Berenguedà, PC 210, 17, v.15: *Plus durs sera que frusca qi eis del tor*) でも、*fruscar* / *frustar* の混同が見られる。やはり *frust(r)ar* の別形として、*fruscar* を認めざるをえない (cf. Paterson, gl.: *fruscar*, v.tr., „to thrash”)。

13-14 : 脚韻の要請とはいえ、千人のなかに40人もいないとは奇妙な表現だが、シュピッツァーはレーヴェントの論文に対する書評で、カタロニア語に同種の表現のあることを指摘している。しかし、それらは「100回のうちの40回」「ときどき」といった意味らしく、ここには適合しそうもない。

16. *reviza* : 写本の読み *reviza* をパターソンは適当な意味がないとして、*reqiza* に直し、ここを«*who have been attacking her*»と解する。しかし写本にない読みを作り上げるよりも、ここは *revezer* «*revoir*»の過去分詞ととらえればよいのではないか。 *vezer* の過去分詞は、*vegut, vezut, vist* などさまざまな形がありえて、*vis, viza* (f.) も文証されている。つまり城内に閉じ込めたはずの「武勲」を、また(かれらのほうで)見つけると投石器で攻撃する」というのである。一般にパターソンのテキストは、思いつきで写本を直している部分が散見される。C写本に欠けている(したがって本稿にはない)第III詩節、18行目で、*mais gan* (M), *mas can* (a'), *fors de* (R) というテキストを、パターソンはわざわざ *macan* (*macar* «*strike, batter, bruise*») に直している。ペルージは字義どおり «*en dehors de*» の意味で十分ではないかと指摘している (Perugi, 2003, p.561; c.-r. (2005), p.386)。

18 (34). *la francha cauza* : 文脈により、ある程度擬人化された表現だと考えられるが、冠詞のつかない *Malvestatz* (v.11) や *Proeza* (v.13) とは異なるので、小文字で始める。ドゥジャンヌは«*la noble chose*», パターソンは«*the noble creature*»と訳している。*cauza* にはラテン語以来の「理屈」「大義」「ことわり」「事件」とか「モノ」「人」「創造物」「財産」など複雑な語義がある。これらの意味を包含した字句なのであろう。*franc* で形容される場合の *causa franca* というような表現は Niermeyer, MLLM² などでは見つからなかった。なお DAOA (606) には「それらの土地は賦課租を免れている」という例(15世紀)がある：... *las quals causas sont franquas et liberals an lo ces ci desoubz escript*.

24 (40). 「ポルトガルからフリースランドまで」高貴な大義(高貴なお方)の血縁にあたる人には、まったくお目にかかれないと、慨嘆しているわけである。イシュトヴァン・フランクは、マルカブリュがイングランドからイベリア半島まで旅行して、結果的にオック語抒情詩を広めるいわば使節の役を果たしたことを指摘している (Frank, 1949)。マルカブリュがじっさいに歩いた世界の、端から端までというようなニュアンスなのであ

ろう。

34 (50). この *pescha* は、魚つりをする (*pêcher*) ほうで、罪を犯す (*pécher*) ほうではない。トプスフィールド (1975, p.79) は後者にとっており、ドゥジャンヌは«*pêche de son côté*»と訳してはいるものの、語彙集ではあきらかに魚つりを示す作品23の23行と同じ項に入れている (cf. Harvey, 1989, p.73; p.224, n.37)。

39 (55). M 写本にしたがえば、「高く売る者は高く買わなくてはならないから」 (*car deu comprar qi car ven*) となり、CRa'によれば「高く買う者は高く売る」となる。前者は反語的でことわざとして適当であるし (cf. Cnyrim, no.110, 111, 112), 後者は「高く買ったら高く売るのは常道」という処世訓めいたものになる (cf. Perugi, 2003, p.557, n.77)。Mの方がよい読みであろう。

42 (58). ここはC独自の *lectio facilior* に近い読み。*uius* は、vil «vil, méprisable»の c.-r. pl.であり、a' 写本の読みを採用してアクロバティックなテキストを作ったバタースン (*ric viu-mort - qe Dieu descesca* !«you rich and powerful living dead - God cast you down !») についての批判は、Perugi, 2003, p.562; c.-r. p.387 を参照。ドゥジャンヌも苦しい解釈を提出している (*Ric cui mortz e Dieu descesca* ! «Riches, puissent la mort et Dieu vous abattre»)。

47-48 (63-64). 48(64)行目の *ni* は、たんなる否定にとどまらず、対比を示す *mas*, やさらには *e*, *o* といった接続詞の代わりにも用いられる (cf. Jensen, *Syntaxe*, §§ 740-741)。また、この行は前行から続いて、*Cist fai (de si dons) [amiga] a sa guiza* と解する (faire のこの種の用法については、SW3, 383 (13) を参照。他写本は *fai* でなく、*ten* (tener) なので問題ない)。

III 解釈の方向性

ここで、この作品を解釈する上での問題点を4つに分けて整理しておきたい。

(1) 作者措定とアレグレットとの関係

M 写本では、Raimbaut d'Aurenga と記され、C 写本ではその目次の *Marc e bru* (C では、なぜか目次でのみこう記載されている) の23作品中の7番目に記されていて、その右横に *Alegret* と記載されている。これをいかにとらえるか。

まず M 写本であるが、本作品と作品18 (*Dirai vos senes doptansa*) が141-142葉にわたって収録されている。冒頭の古い目次ではマルカブリュの作品としているのに、本文ではその直前に記された作品群と同じ作者名である。アスペルティの指摘によれば、その直前の135葉 r からラインバウト・ダウレンガの作品なのであって、本作品の冒頭の文字 B が4-5行にわたる大きなサイズであることから、この種の大文字は M 写本ではセクションの区切りに現れるので、マルカブリュの部に移るところを写字生が誤って前と同じ作者名を書きこんだにすぎない⁴。つぎに C 写本の目次におけるアレグレットという記載は、マルカブリュという作者名の訂正ではなく、アレグレットの作品に関連するということを示したものとみられる⁵。したがって、マルカブ

リュという作者指定に問題はない。Ra¹写本が作者をアレグレットとしているのは、おそらくトルナーダの「アレグレット」(v.49(65))によるものであろう。

じっさいこの作品は、アレグレットの「いまや枯れた木々が現れ」*Ara pareisson l'arbre sec* (PC 17, 2) への反論ないしはパロディーと考えられている。作品の構成と語彙の類似はたしかに明瞭であるし、何よりも、本作品の第VI, VII詩節(C写本以外では第VIII, IX詩節)が、アレグレットのこの作品を踏まえるとよく理解できるのである。詳しい両者の比較は既存の研究にゆずって⁶²、第VI詩節の解釈について一言しておきたい。45行目の *sel* と、46行目の *cist* についてパタースは同一人物を指すと考えて、44行目の *sia* を *siar* «cesser» (cf. SW7, 564) の 3sg. ind. prés ととる。「一族郎党を飢えさせているあの男は、公然たるお世辞をやめようとしな、そしてその同じ男は白い肌着を着て」と解釈するのである。中世文学によく登場する、恥ずべき従僕ないし悪名高い家令 (infamous stewards or seneschals notorious) だと考えている。だが、*sia* は *esser* の subj. (optatif) ととって、ドゥジャンヌの解釈のように、v.45の *sel* は «à celui» と解したほうが適切であろう。そもそも遠近の相違のある代名詞を同一人物とみなすのには無理があるだろう。この二者は、あきらかに別人であり、前者はアレグレットが、*lo seïnhor, de cui es Occidentz* (v.35)「西欧がその人に従属するところの主君」とまで賞賛したアルフォンソ7世のことで、後者は語源からいっても近い相手、すなわちこの詩をうたいかける相手であるアレグレットのことをさすのではないか⁶³。冒頭からの詩節が物語としての抒情詩本体であるとするなら、最後についているトルナーダは、聞き手(聴衆)に語りかける外界への窓口の役を果たしている。そしてトルナーダ直前の詩節は、語り手によるそれまでの一人称体での3人称(ダームなど)についての語りか、唐突に2人称体に代わり、最後に付される呼びかけのトルナーダを予告する場合がある。アップルのいう「トルナーダ風の詩節」*Tornadenstrophe* である⁶⁴。46(62)行目の「この男」は目の前にいる、あるいはいるかのように呼びかけている、アレグレットに他ならない。

(2) 反語とパフォーマンス

いま述べた44行目からあとは、この詩のいわばパフォーマンス性を示すものである。マルカブリュはその作品の力強さを、聴衆を喜ばせるために、そしてその注意をひきつけておくために、反語を用いて発揮することが多い。ラテン語のレトリックの教科書にある技術を自家菜籠の中のとしているのである。ゴントはトルバドゥールにおけるアイロニーの研究の中で、話しぶりやジェスチャーに依存するところの多い反語は、言語の型としては定義しにくいと指摘している⁶⁵。確かにそのとおりであろう。しかし、この作品11のなかで明瞭にその反語であることがわかる箇所がある。それは、47(63)行の *valen* である。他写本では *sufren* «qui supporte l'etat de mari trompe»「寝取られ男の」(PL, *sofrir*) で、そのほうが意味は素直ではある。アレグレットの作品にもこの語彙が現れていた。しかしいま述べてきたような、目の前に相手を置いて語る

(歌う) 情景を想像してみれば、Cの *valen* の意味も反語として生きてくる。しかも、このほうがレトリックとして美しい。第VI詩節の最後の3行(46, 47, 48)の脚韻をなす単語: *camiza, valen, guiza* が、続くトルナーダの脚韻: *guiza, valen, camiza* と順序を逆にして同一語を繰り返すことになる。Cを底本に選ぶ理由のひとつはここにある。

(3) 歴史的な解釈と語彙学

第VI詩節のアルフォンソ7世(在1126-1157)への悪口から、ドゥジャンヌはこの作品を、マルカブリュがスペインからむなしく帰国してからの作品であろうとしていた¹⁶⁾。じっさい作品22(1137-38ころ)では、「陛下のもとに馳せ参じました」(v.3)とアルフォンソの庇護を求め、作品23では厚遇されないことへの不満と幻滅を表明している。本作品もこれにつらなるものであろうか。王の庇護を代わって受けたアレグレットへのやつあたりである。イシュトヴァン・フランクは、40(56)行目の「ピサの流儀(法)に従えば」に着目して、成立年代を1145年と提議している。

トゥールーズ伯アルフォンス・ジュールダン(-1148)は1141年に、領主ギヨーム6世の支配に抗して立ち上がったモンペリエの住民に加担したが、利にさといイタリアの都市ピサやルッカやジェノヴァはギヨームと同盟を結び、反乱する人々を抑えこむのを応援した。ピサはその見返りにモンペリエにいくつもの特権を要求した。さらに1143年にギヨーム6世がローヌ河の航行権からの利権を確保しようとしてトゥールーズ伯を決定的に破ったさいには、イタリア人たちは伯に賠償金として純銀2000マルクをサン・ジル(領主はトゥールーズ伯)の住民たちに払わせることを要求したのである。だが1144年以降、ピサはルッカといざこざを起し、その戦闘に破れて、南仏におけるイタリア人貿易のヘゲモニーを失い、ジェノヴァがそれを握ることになった。

これをピサの立場からすると、まったくの金目当てで参加した戦いにおいて、初めはサン・ジルの債権者となり賠償金を得たものの、最後には大きな損失(海上での商業の拡大の停止)をこうむったわけである。トゥールーズ伯がマルカブリュのパトロンの一であることを考えると、マルカブリュはピサの失敗を横目で意地悪に見ていたであろう。これが「高く買うはめになった」(M写本)という表現の典拠ではないかというのである。このような歴史的な見方にたいして、パターソンは *ley (lei)* が単なる商取引上の慣習(これは「高く買ったら高く売る」という CRa¹ 写本の読みをさすのだろう)をさすのかもしれないし、ピサは1144年以降も主としてジェノヴァと覇権を争い続けたのであるから、フランクの引く顛末のみがこの表現にかかわるという確証はないという(解釈は«according to the law of Pisa»)。ピサは商業上の繁栄で有名なイタリアの都市のひとつであるから、私は、いちおうピサの「流儀」ととらえておくが、フランクの説にも説得力を感じないではない。

つぎにこの行(v.40(56))全体の読みについて。各写本は、*asegon la ley de Piza (CM)/ segon la razon de Piza (R)/ ar segon la lei de Piza (a¹)* となっており、あとの二つの写本は「ピサの理屈からいうと」、「いまやピサの法(規則・流儀)からすると」(ドゥジャンヌは a¹ をとる)と解

せる。CM 写本の *asegon* «selon» を、フランク (*a segon*) とパターソンは二つの前置詞の複合形ととらえている¹¹¹。マルカブリュの別の作品 (PC 293, 33, v.7) には *es(s)egon* (←*ensegon*) があり、同様の意味を与えている (cf. Perugi, 2003, p.566)。ふたつの有力な写本が *asegon* を採用していることもあって、FEW 11, 385 (*sēcūndus*, cf. FEW 11, 493: *sēqui(assequi)*) にはこのような形はないが、パターソンの語彙集にあるように (ただし *a* と *segon* は離して ← AD SEQU ENTEM?), 認めるべきではないかと思う (他に 4 例: Guiraut de Bornelh, PC 242, 72, éd. Kolsen, v.26 (éd. Sharman, v.32); *Enssenhamen de l'escudier*, éd. Sansone, v.93; *Dona per cuy planc e sospir*, éd. Schultz-Gora, v.184, 189; cf. TL9, 382: *par selonc* “neben, längs, entlang”)。Ph. Olivier の編纂による DAOA (103, 489) は *asseguen(t)* « qui vient immédiatement après dans le temps, suivant » (1384年); *enseguen (essequen)* を収録している。

(4) 「間テキスト性」

トルバドゥールの作品の間に見られる応答性、あるいは広く中世の文学との影響関係に着目する研究は1980年以降から盛んになり、とくにマリア・ルイザ・メネゲッティ (*Il pubblico dei trovatori*, 1984, 2^e éd., 199) やヨルン・グルバー (*Die Dialektik des Trobar*, 1983) により深められてきた。これをとりあえず、広い意味での *intertextualité* (間テキスト性) の研究と呼ぶとすれば、本作品もアレグレットの一作品との関係は、すでにC写本の段階から着目されてきたわけである。そもそも、それを知らないと後段には意味の通じない部分がでてくる。

ところで、この作品の46-48(62-64)行における白い肌着と領主の妻の不倫について、これはトリスタン伝説への言及ではないかとゴントが主張している¹¹²。トリスタンがマルク王の妻となったイズーと密通しているという人間関係の図式にあてはめ、仮説ではあるがと断ったうえで、46(62)行の「白い肌着」*la blanca camiza* という表現について、イズーがブランジアンに借りた「例の(*la*)」肌着を連想する。アイルランドからのトリスタンとの船の旅の途中に白い肌着を汚したイズーは、侍女のブランジアンから大事にしまってあった別の白い肌着を借りる。これは、船中でのトリスタンとの不倫の成就と、マルク王との新婚時の処女ブランジアンによる肩代わりを示す隠喩であった。ラインバウト・ダウレンガの「鳥が鳴いても 花が咲いても」(PC 389, 32) の第V詩節においても歌われたモチーフだが¹¹³、マルカブリュもこれを利用して、おべっかつかいのアレグレットは白い肌着をつけて自分の主君の妻を誘惑し、その夫をコキユにしているとみなすのである。

しかしこれは無理な連想だと私は思う。アレグレットとの関連だけで、ここは十分とらえられる。そもそも主君の妻を誘惑しているのに、その妻がそれまで無垢であったというのは矛盾しているし、なぜ処女性象の象徴ともとれる白い肌着をアレグレットが身に着けなければならないのか。トルナーダ直前のこの第VI詩節は前半がアルフォンソ7世を讃えたアレグレットへの間接的な批判であり、後半はジョングルール風情の、みなりの卑しいアレグレットが、高級な白い肌着をぬ

けぬけと着けて主君（パトロン）をコキユにしていることへの痛烈な皮肉なのではなからうか。トルナーダではそれに畳みかけて、悪人（アルフォンソ7世）を立派な男とみなしたり、修道士の着る粗末な長外套（gonelha）を着ているお前のような奴が、白い垂麻布の清潔な下着をどうしてつけられるのだ、という皮肉を放つのである⁽¹⁴⁾。

※ ※ ※

ロンカリアは1955年の第一回南仏語南仏文学研究学会において、マルカブリュのテキストについて大略こう述べていた。「象徴性が高いという難しさに加えてほかの要素がある。歴史上の事件への暗示のとらえがたいこと、裏に隠れているアイロニーやパロディーの把握への障害、伝承の過程で発生した写本のテキストの劣化、しかしこれらにもましてまず第一の困難は、ひとえにその語彙にある」。この論考においては、作品11におけるこれらの面をまとめてみた。とくにCという一写本の提供する語彙について力点をおいて考察してみようとしたが、それはマックス・プフィスターのいう、写本ごとのデータの文献学的な解釈の重要性を考慮しようとしたからにはかならない⁽¹⁵⁾。

注

- (1) cf. Spanke, pp.98-100; Dejeanne, p.223.
- (2) Nizet 書店 (Paris) の Les Classiques d'Oc シリーズの第7巻として予告されている。また, Seto (2002), pp.137-138.も参照。
- (3) Seto (2002); (2009). 前者は, 1997年4月に日本ロマンス語学会創立30周年記念のコロックで発表したものだが, 活字になるまでに5年以上かかり, その間にゴントラの新しい校訂版が出版された。新しい版を参照していないのはそのためである。
- (4) Asperti, p.141.
- (5) 瀬戸「フランス国立図書館856写本における目次と索引—とくにその作者措定について—」『早稲田大学図書館紀要』第49号, 2002, pp.1-21 (p. 5).
- (6) Mölk, pp.92-95; Paterson, pp.148-149; Martín de Riquer, *Los trovadores* (1975), t.1, pp.236-240.に詳しい。
- (7) Boissonade (p.238) も同一見解をとる。
- (8) 瀬戸「トルナーダ(反歌)考—ベルナルト・デ・ヴェンタドルンの作品を中心に—」『Études Françaises 早稲田フランス語フランス文学論集』第11号, 2004, pp.1-25 (pp. 12-13).
- (9) Gaunt (1989), pp.184-185.
- (10) Dejeanne, p.223. Boissonade (は1137-38年と1145年の間とする(p.239). cf. Paterson, p.147.
- (11) Frank (1946-47), pp. 33-38 (n.12).
- (12) Gaunt (1986), p.111.
- (13) 瀬戸「セニャルあるいは窓から振る手—トルバドゥール詩における「仮名」について—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』, t.50-2, 2005, pp.5-33 (pp.18-19).で論じた。
- (14) *blancha camiza* (chemise blanche) のもつ意味あいについては, 徳井淑子「中世フランス文学における下着 chemise の表現—着衣と裸体の狭間で—」『服飾文化学会誌』t.5-1, 2004, pp.33-39.に詳しい。chemise は男

女ともに身につける肌着だが、愛をうながすと同時に拒絶するという両義性を秘めるとい興味深い論考である。なお Perugi, 2003, p.585も参照。

(15) Pfister(2005), p.639.

Bibliographie sommaire

[textes]

Jean-Marie-Lucien DEJEANNE, *Poésies complètes du troubadour Marcabru*, coll. Bibliothèque méridionale, 1re série, t.XII, Toulouse, Privat, 1909 [c.-r. par Alfred PILLET, «Beiträge zur Kritik der ältesten Troubadours», in *89. Jahresbericht der Schlesischen Gesellschaft für Vaterländische Cultur*, Sonderabdruck: Breslau, G.P. Aderholz, 1911, pp.1-19 (III: Zum Texte von Marcabrus Gedichten, pp.11-19, surtout, p.14); par H.-J. Chaytor, in *Modern Language Review*, t.6, 1911, pp.549-556 (554-556) ; par Giulio BERTONI, in *Studi Medievali*, t.3, 1908-1911, pp.638-672 («Due note provenzali», I: Marcabruno, pp.638-657, surtout, p.649)].

Simon GAUNT, Ruth HARVEY et Linda PATERSON, *Marcabru, A Critical Edition*, Cambridge, D.S. Brewer, 2000 [c.-r. par Catherine LEGLU, in *French Studies*, t.55, 2001, pp.525-526; par Peter T. Ricketts, in *Medium Aevum*, t.71, 2002, pp.341-343; par Dominique BILLY, in *RLiR*, t.65, 2001, pp.589-597; par Sara CENTILI, in *Romania*, t.121, 2003, pp.544-551; par Maurizio PERUGI, in *CCM*, t.48, 2005, pp.381-389 («Marcabru, une édition critique - A propos d'un ouvrage récent»)].

[bibliographies]

François PIROT, «Bibliographie commentée du troubadour Marcabru», in *Le Moyen Age*, t.73, 1967, pp.87-126.

Simon GAUNT et Ruth HARVEY, «Bibliographie commentée du troubadour Marcabru. Mise à jour», in *Le Moyen Age*, t.94, 1988, pp.425-435.

[études sur PC 293, 11 ou d'autres pièces de Marcabru]

Carl APPEL, «Zu Marcabru», in *Zrp*, t.43, 1923, pp.403-469.

Stefano ASPERTI, «Sul canzoniere provenzale M: ordinamento interno e problemi di attribuzione», in *Romanica Vulgaria - Quaderni*, 10/11, L'Aquila, 1989, pp.137-169.

Prosper BOISSONADE, «Les personnages et les événements de l'histoire d'Allemagne, de France et d'Espagne dans l'œuvre de Marcabru (1129-1150) - essai sur la biographie du poète et la chronologie de ses poésies», in *Romania*, t.48, 1922, pp.207-242.

István FRANK, «Les troubadours et le Portugal», in *Mélanges d'études portugaises offerts à M. Georges Le Gentil, sous le patronage de l'Institut para a Alta Cultura*, Lisbonne, 1949, pp.199-226.

id., «La plus ancienne allusion à l'Italie dans la poésie des troubadours», in *CN*, t.6-7, 1946-1947, pp.33-38.

Simon GAUNT, «Did Marcabru know the Tristan Legend?», in *Medium Aevum*, t.55, 1986, pp.108-112.

id., *Troubadours and Irony*, Cambridge, Cambridge University Press, 1989.

Ruth E. HARVEY, *The Troubadour Marcabru and Love*, Westfield College, University of London, 1989.

Catherine LEGRU, «La place du sermon dans le discours satirique de Marcabru», in *Actes du IV Congrès International de l'AIEO, Vitoria-Gasteiz, 22-28 août 1993*, pp.173-187.

Kurt LEWENT, «Beiträge zum Verständnis der Lieder Marcabrus», in *Zrp*, t.37, p.313-337; 427-451 (surtout, p.326-327).

Ulrich MÖLK, *Trobar clus Trobar leu, Studien zur Dichtungstheorie der Trobadors*, München, Wilhelm Fink,

1968, pp.64-65.

Maurizio PERUGI, *Saggi di linguistica trovadorica*, Tübingen, Stauffenburg, 1995.

id., «Per un'analisi stratigrafica delle poesie di Marcabruno - Note in margine a una nuova edizione critica», in *Studi Medievali*, t.44, 2003, pp.534-600.

Max PFISTER, «La langue de Marcabru», in *Études de langue et de littérature médiévales offertes à Peter T. Ricketts*, Turnhout, Brepols, 2005, pp.631-644.

Aurelio RONCAGLIA, «I due sirventesi di Marcabruno ad Alfonso VII», in *CN*, t.10, 1950, pp.153-183.

Naohiko SETO, «*Fals'amor* de Marcabru selon un chansonnier occitan (PC, 293-18)», in *Lesser-Used Languages and Romance Linguistics*, éd. par Tullio De Mauro et Shigeaki Sugeta, Roma, Bulzoni, 2002, pp.137-155.

id., «Le grondement de la montagne qui accouche d'une souris (Marcabru, PC 293, 19: version courte)», in *La France Latine*, t.148, 2009, pp.125-144.

Hans SPANKE, *Untersuchungen über die Ursprünge des Romanischen Minnesangs, zweiter Teil: Marcabrustudien*, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1940.

Leo SPITZER, «Zu Kurt Lewents „Beiträge zum Verständnis der Lieder Marcabrus“», in *Zrp*, t.39, 1919, pp.221-223.

Leslie T. TOPSFIELD, *Troubadours and Love*, Cambridge, Cambridge University Press, 1975, pp.70-107.